【土木史研究　第22号　2002年５月　自由投稿論文】

「新未来記」を土木的に読む*

-Imaginary Discription of the year 2065 by a Dutch Polymath who lived in the year 1865-

○長谷川　博**、桝山　清人***

By Hiroshi HASEGAWA, Kiyoto MASUYAMA

要旨：筆者等の関係する攻玉社学園の創設者近藤真琴（1831-1886 天保２-明治19）は海軍兵学校の教官であり、また蘭学者として和蘭語の航海術書などを翻訳した。明治政府の重臣肥田浜五郎は、たまたま外遊で発見した“2065年”という和蘭の科学空想小説の翻訳を明治２（1869）年に近藤に依頼した。その訳本は明治11年９月に「新未来記-未来の瞥見」として出版され、大いに読まれた。

この「新未来記」は和蘭のピーター・ハーティングという医者、化学者、地質学等の博物学者が1865（慶応元）年から、200年後の2065年を空想で記述したものである（ペンネームはDr.ジオスコリデス）。その中にはテレビ・ラヂオ・飛行船などを予想し、土木的には、水道（冷・温水）・大鉄橋・都会の大ドーム・アルプスの大トンネルから世界統一語、統一通貨、統一度量衡、統一時間等を予測している。

本論文では、土木的視点でこれを紹介する。

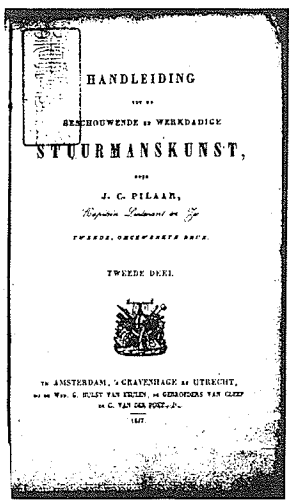
１．はじめに

1.1　蘭学者・近藤真琴

蘭学者で、攻玉社の創設者[1]である近藤真琴（図－１）は、江戸麹町鳥羽藩上屋敷で生まれた。

図－１　近藤真琴

諱は真琴、字は徽音、号は芳隣、通称は誠一郎、姓は菅原と称した。幼くして父を失い、母湖山に和漢の学、殊に論語大学の素読を受ける。1853（嘉永６）年、ペリー来航に刺激され「時事ニ感ズル所アリ、意ヲ決シテ蘭学ニ志シ」岸和田藩医高松譲庵、村田蔵六（大村益次郎）等に蘭学を学び、1863（文久３）年、ピラールの「航海書」（通称スチュールマン　キュンスト）を訳し「先生ノ名漸ク著ハル。コレヲ先生発迹（出世）ノ初ト」した（図－２）。



図－２　スチュルマンキュンスト
（国会図書館蔵）

そして、1864（元治元）年軍艦操練所測量算術教授方となった。

---

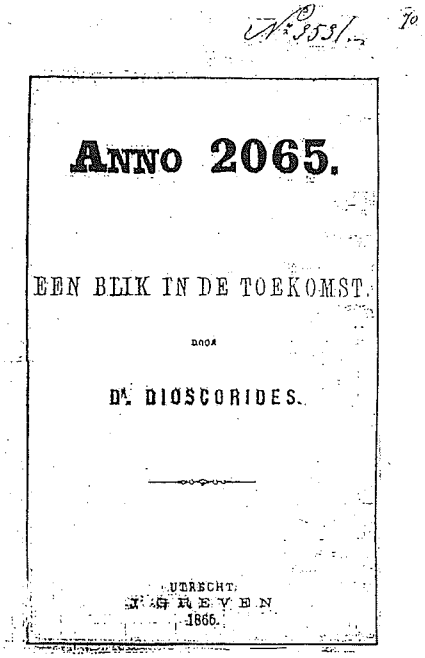
*　Keywords:科学空想小説、技術予測、近藤真琴

**　正会員　元攻玉社学園資料室
（〒153-0061　目黒区中目黒４-16-16）

***　正会員　（財）全国建設研修センター

1866（慶応２）年、軍艦操練所の先輩肥田浜五郎がオランダ留学から帰国した。彼が留学中に、彼地でジオスコリデス著「紀元二千六十五年」が出版された。浜五郎はこれを持ち帰り、真琴に翻訳を依頼した（1866年）。真琴はその翻訳を1868（明治４）年12月に完成しているが、なお推敲を要するものと考えて、出版はしなかった。そして1878（明治11）年９月に浜五郎に促されて、推敲をする暇もなく、各編の終に、「癡道山人曰く」として訳者の評語を付して（これを「豪傑訳」というとのこと）「新未来記」として出版した　（図－３、図－４）。

図－３　新未来記（攻玉社蔵）



図－４　新未来記（原著）
（和蘭国立図書館蔵）

真琴は、海軍教官として、また攻玉社創設者として、幾多の人材を世に送り、国家隆興の原動力とした功によって、1907（明治40）年、帝国教育家大集会の席上で、帝国六大家教育家の一人として、福澤諭吉等と共に追頌された。新未来記は、柳田泉の「明治初期の飜訳文学」[2)a]の「明治初期の飜訳文学年表」によると明治期の「飜訳SF」の第１号とされている（後述）。

1.2　３種の「新未来記」の実態

前記、柳田の「年表」によると「新未来記」と同類のものが、次のように３種示されている。

（１）明治元年　全世界未来記
　愛梅主人（真琴）訳稿
　「紀元二千六十五年。一名未来の瞥見」

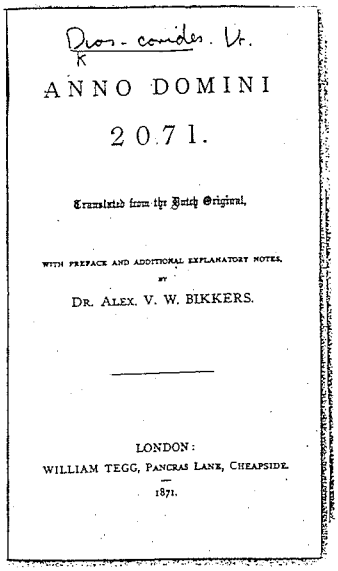
（２）明治７年　開化進歩　後世夢物語
　上條信次　奎章閣　奎章閣は即ち山城屋也

（３）明治11年　新未来記
　近藤真琴　青山　明治元年の訳なり。
　和蘭人「ジオスコリデス「紀元二千六十五年」というものの由。

順序を換えて説明すると、３は前節の図－３に示したもので、（２）の「後世夢物語」が既に出版されているので、わざわざ「近藤真琴十年前訳述」と表書きしたものであろう。

（２）は、図－５、図－６に示すように、1871年ロンドンで英訳されたものから、上條信次が重訳したものである。

図－５　後世夢物語
（国会図書館蔵）

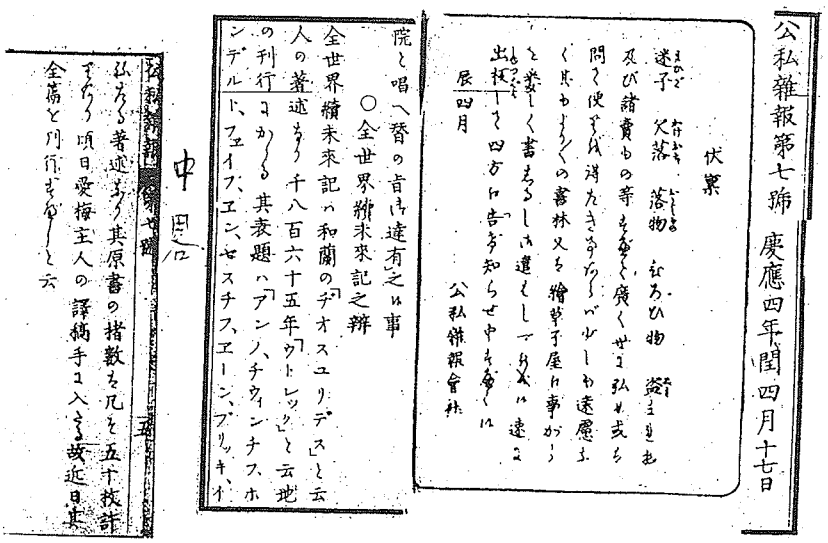


図－６　AD2071
（英国国立図書館蔵

（１）の「全世界未来記」は既述のように真琴が新未来記の訳出を完成したのは慶応４年12月であるが、同年閏４月の「公私雑報」（一部略）（図－７）に「全世界続未来記」として「近日全篇を刊行すべしと云」と予告した（図－７）。勿論「全世界（続）未来記」なる訳本はこの世には誕生しなかったのである。柳田の年表は現在でも引用されているようである（図－８）。

なお、新未来記の著者Dr. Dioscorides（pen name）については、The Encyclopadia of Science Fiction (1992), St. Martin's Poess pp. 549によると本名Dr. Harting Pieter (1812-1885)　和蘭の博学者（polymath）で（生物学者、地質学者、薬学者・・・）と示されている。

当時は、「八十日間世界一周（ジュール・ヴェルヌ）、二万里海底旅行（ジュール・ヴェルヌ）など初期の空想科学小説が流行した。



図－７　公私雑報

未来記

文学こぼれ話

ジオスコリデスの『紀元二〇六五年』が明治七年、『開花進歩後世夢物語』（上条信次訳）、同十一年『新未来記』（近藤真琴訳）として翻訳出版されるのを皮切りに、明治の半ば、数多くの未来記が出版された。西欧文明を取り入れ、文明開化の世となるに従い、人々の関心は、文明の花咲く未来の日本の姿に向けられたのである。末広鉄腸の『二十三年未来記』は、未来の国会開設を踏まえて書かれたものだが、三十万部という破格の売れ行きを示した。さらに外国人の内地居住が認められることを想定して『内地雑居・東京未来繁昌記』（夢遊居士）などの所謂内地雑居物が多数書かれた。日本の近代化が定着し、国家体制が固まるにつれて、これ等未来記は消滅して行った。しかし、こうした未来の社会に思いを馳せた小説が次々と出版され、世に迎えられたことは、以後今日まで例が無い。未来の社会を夢見ることなど我我の念頭から去って随分と時が経つわけだ。

図－８　未来記

（“海”昭和53.12　149ページ）

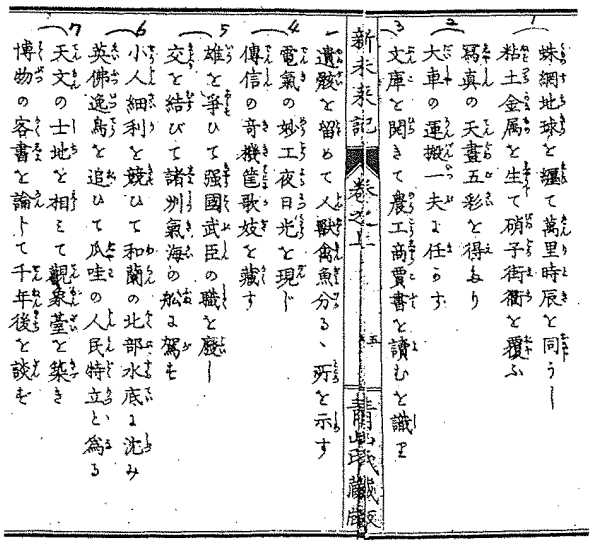
２．新未来記の内容

2.1　新未来記の章節

新未来記の原著は（図－４）のように紀元2065年副題「未来の瞥見」である。原著はパラグラフ毎に１行空けてあるだけで、特に章節は分けてない。

真琴はこれを図－９のように７編に分け、各編毎に２行の小題をつけて、読み易くしている。

真琴は前記のように、父を早く失い、母湖山から漢書の教えを受けた一角の国学者であったが、訳語は俗語を多く交え、時々字句を加えて語勢を助けたと「例言」で述べているように当時としては、平易明解な読物であったようである。以下各編について、主として土木的観点から紹介する。新未来記は2065年を目途にしているが、2002年の今日既に達成された科学的進歩に驚かざるを得ない。



図－９　新未来記の７小題

2.2　各編についての大略説明

第１編

2065年には、飛行船、ラヂオ等が利用されるので、世界共通の時計が必要となり、真時は太陽が南中した地方時を示し、平時は平均太陽時で号報により平時を示す。

亜列多（あれうと）は米里幹（あめりか）と亜西亜の間の亜列多島の東岸に日の立昇る刻限を零時として時辰（とき）を定める（世界標準時）。

（以上３種）

都会は屋根で覆われ、空調され、各家庭には蛇口をひねれば湯が出て、家内は暖房空調が行われる。

家の安全の請負会社（英語でインシューランス）もある。

カラー写真（カメラオブスクラー　暗室）、電気通信機もある。

第２編

天地自然の景色を真似て、そのまま写し出す画工、馬にもひかせず唯一人り。上に乗りたる御者のみにてさも軽々と走るあり（自動車）（世の常の道を自在に走るべきもの一軽気と常の空気との混合物を爆発させる）

大気を圧縮して筒に入れ、液化させて貯力し、必要に応じて貯力を引き出す筒の製造所

第３編

図書館・動植物館・博物館の設置、両面印刷

第４編

街は電気による不夜城、自鳴楽器（オルボルー電蓄？）

第５編

人々の諸国交流による世界語の発達、通貨の統一。

世界から戦争がなくなり、軍人兵卒は演戯（しばい）の舞台の上ならでは見ることなく、「凡そ世界にあらゆる人は、皆兄弟の思ひをなす」に至る。

世界人口は2065年までに1865年より「倍よりも猶多くなった。」

然し、食糧は地の理と時候に相当するものを作り、人民自由の貿易により産物を交流する。鉄道、アルプスのトンネル等交通の発達によっても物資の流通が自由になる。

農業は機械化し、「農夫といへば一種の製作局となる」

「都府の汚れもの。その気は人に毒なるを水と混じて肥料となし、かかる方法彌更に巧みになりて、田野に導き少しも捨つるものあらず。」

「奇巧海に橋して車馬を通わす」とは、オランダの海湾を跨ぐ橋か、ドーバー海峡の架橋を待望した夢であろうか。

前項の戦争廃止については別項で次のように

この書ができて約100年を経た1965年頃に欧羅巴に大戦争が起こり、「英吉利、佛蘭西、魯西亜、米利堅など互ひに都市は皆兵火に焼かれ、其損害数へも尽せぬばかりにて、たとえ勝つとも其損失甚だ多きものなれば、これより後は戦争次第に稀になりゆきて、遂に全くやみにけり」と書かれている。

この編の終りに、癡道人（真琴）曰く「我国は東洋にあり、亜細亜の形勢はこれと異なり、其兵を養い、其外侮を禦ぐを要す」と「世人の文弱に流れん事を恐れ」ている。

第６編以下省略

３．まとめ

新未来記は、政治・人文・社会・科学・工学のあらゆる方面に亘って、200年後記述しているが、その訳が誠に的確で分かり易いのに驚く他はない。そして、2002年の今日既に、その予言が「戦争と平和」以外は完成されているのは、残念に耐えない。近藤真琴が「世人の文弱に流れん事を恐る」の語は今日でもなお通用している。

4．参考文献

1）近藤真琴に関する一般文献

a. 近藤真琴先生伝、林秀樹、昭和12年　攻玉社
b. 近藤真琴伝、天ヶ瀬恭三、昭和61年　攻玉社学園
（近藤真琴先生略伝を含む）
c. 近藤真琴資料集、国金海二、昭和61年　攻玉社学園

2）ＳＦ翻訳に関する一般的文献

a. 明治初期の翻訳文学、柳田泉、昭和10年
松柏館書店（翻訳文学年表を含む）
b. 日本ＳＦこてん古典（１）、横田順彌、昭和55年
早川書店